

学位論文題名

## 魯迅の祖父周福清攷

——その家系及び生涯について——

### 学位論文内容の要旨

本論文が考察の対象とする周福清（1837-1904）は、周氏三兄弟——魯迅（本名周樹人）、周作人、周建人——の祖父に当たる人物である。周福清は科挙の最終試験に及第し、中央の官僚として勤務した経験をもつ有能な知識人であったが、清朝末期の光緒19年（1893）、科挙に関わる不正事件を引き起こし、周家は一気に没落する。本論文は、魯迅の文学を解明する重要な鍵として、その祖父周福清を取り上げ、家系の全容、周福清の生涯、不正事件の経緯、の三者を総合的に論じたものである。

序章では周福清研究の意義と必要性を指摘し、過去の研究状況とその問題点を明らかにしたうえで、本論文の目的および方法について述べる。

第1章では、周氏の始祖とされる北宋の哲学者周敦頤から周福清の父親の世代に至る約800年の家系を追跡する。次いで明代中期、江蘇省呉江より浙江省紹興に移り住んだ逸齋公を第1世開祖とし、以下、第11世までの系譜および履歴を詳述する。

第2章では、周福清誕生時の家族および周福清と同世代の人々を取り上げる。父以埏は幾度か郷試を受験するが失敗、この父親の挫折が周福清の官界への執着につながったとする推測を示し、母親戴氏については、その厳格かつ偏屈な性格が、周福清の性格や生き方に大きな影響をあたえたと指摘する。姉はその結婚相手章錫祺が後年、周福清に科挙の不正を強く依頼し、周家没落のきっかけを作ったとする。

第3章では、三つの受験時代を記述する。第一の童試受験時代については、周福清が学問を授かった教師9名の経歴を紹介し、勉学への情熱は負けず嫌いの性格と母親戴氏の厳しい教育によることを指摘する。第二の郷試受験時代については、最初の妻孫氏とその家族の経歴、長女徳、二男文郁の誕生とその人物像、文郁と同世代の人々の経歴を紹介、太平天国軍による紹興占領の影響について考察する。第三の会試受験時代については、同治7年および同治10年（1871）の会試（及第）、殿試について検討し、故郷紹興での反響について考察する。

第4章では、翰林院庶吉士時代の周困と家庭の状況、書籍刊行をめぐる物議について検討する。〔第1節〕当時の教習および翰林院の官員の名簿を掲げ、周福清との関係を確認する。〔第2節〕紹興出身官僚グループの中心人物、李慈銘と周福清との関係、および李の見解が世間の評価に与えた影響について考察する。〔第3節〕散館試の採点官の名簿、受験者の成績、授職状況を紹介します。知県職を軽んずる風潮への周福

清の批判精神を評価する。〔第4節〕知県即用の判定を受けた直後の一時帰郷を取り上げ、その目的、紹興での言動、息子の婚約話、相手の家柄等を検討する。

**第5章**では、4年にわたる知県時代を取り上げる。〔第1節〕当時の地方政府（江西）の主要官員の経歴を紹介し、周福清周辺の官界の状況を明らかにする。〔第2節〕知県としての周福清の仕事ぶりと省政府首脳による評価を検討し、清廉な能吏という役人像を示す。周福清が江西で交わりを結んだ人物につき検討し、人間関係の広がり を明らかにする。〔第3節〕周福清は光緒4年（1878）、両江総督に弾劾され、知県を罷免、教諭への降格処分を受ける。吏部が退官を主張したのに対し軍機大臣が降格としたのは、周福清が有能な官僚の養成所とされる翰林院出身であったこと、5名の軍機大臣と両江総督、周福清との間には同年、師弟、同郷、上司下僚といった特殊な関係があり、特別の配慮が働いた結果であるとする。

**第6章** 降格処分の翌年、周福清は内閣中書の資格を購入、定員外中書として勤務し、9年後、正式に中書に就任する。将来、重要案件の原案作成に携わり、間接的に政治に関わろうという希望があったものと推測し、14年にわたる中書時代の動静を検討する。〔第1節〕赴任時の関連官員との関係を明示する。事実上の長男および長女の結婚に関連し、姻戚一族の経歴、人脈を紹介、うち2名が科挙不正事件の関係者となることを指摘する。周福清の交遊状況については、貧困に苦しんでいた周福清にとって同郷の友人がパトロン的存在でもあったこと、李慈銘を中心とする同郷人グループに積極的に参加していたことを明らかにする。〔第2節〕光緒14年（1888）、周福清は内閣中書に正式に就任する。勤務状況、抜擢人事等の動きを取り上げ、優等の評価を得ていたことを明らかにする。光緒18年（1892）末に母親が亡くなったのに伴い、周福清は翌年春に帰郷し、喪に服する。中央での出世を望んでいた周福清にとって、長期（27ヶ月）におよぶ無為の服喪期間は大きな痛手であったとし、母親の発病から死までの経過、周福清の動向等について検討する。

**第7章** 光緒19年（1893）、故郷紹興にあつて母親の喪に服していた周福清は、息子と親戚友人の子弟を郷試に及第させるため、試験官に賄賂を贈り発覚、逮捕され入獄する。本章ではこの不正事件の発生から最終判決までの記録を分析し、事件の真相に迫る。〔第1節〕不正の対象となった光緒19年恩科浙江郷試につき、試験関係官員の名簿、試験問題、及第者名簿を紹介し、重要官員2名が周福清と進士同年の関係にあったことを明らかにする。〔第2節〕上奏文と上論文、計7篇の朝廷資料に基づき、事件を再構成する。〔第3節〕当時の新聞記事、中央、地方あるいは同郷その他の官僚の日記、上奏文、手紙等を紹介し、この事件が広く世間の注目を浴びた理由を考察する。〔第4節〕公的資料には疑問点が少なくないとして、同時代人の証言、後世の研究等を参考に事件の経緯に検討を加え、(1)事件は周福清と姻戚友人5氏の事前謀議に基づく計画的犯行である。(2)進士同年の正考官（試験官の長）は穏便な措置を願ったが、居合わせた副考官が摘発を主張した。(3)周福清は他の事件関係者に累を及ぼすことを恐れ、一人で罪をかぶろうとした。(4)杭州知府は周福清を救済しようとして犯行の否認を勧めたが、周福清がこれを拒否し、やむなく供述内容のまま上申した。浙江首脳は事件の拡大による民生、官界の混乱を防ぐため、周福清の自供に沿うシナリオを作成した。親友の刑部尚書および李慈銘等、同郷人、同年、同僚などの

関係にある各所の官僚、親戚友人が周福清救済のために尽力した。(5)不正事件の続発を憂いていた光緒帝は、重刑に改めることによって綱紀の肅正を図ろうとした、と指摘、事件の真相は公的資料が示すものとは全く異なるとする。

第8章では、事件があたえた影響として、周氏以外の死者、家族の避難、勉学状況の変化、長男文郁の死、経済的影響等について記述する。

第9章では獄中時代および出獄以後、死に至るまでの経緯を検討する。周福清に関しては、獄中での特別待遇、死刑執行の延期、恩赦による刑の執行停止、釈放等の経緯を考察し、そこに刑部尚書ら親友の配慮が働いていたことを明らかにする。

終章では、本論の成果が魯迅・周福清研究のみならず、他の諸分野の研究にも貢献しうることを述べ、今後の研究の方向を示す。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 須 藤 洋 一

副 査 教 授 武 田 雅 哉

副 査 教 授 三 木 聰

学 位 論 文 題 名

## 魯迅の祖父周福清攷

—— その家系及び生涯について ——

本論文は、近年に至るまでほとんど取り上げられることのなかった魯迅の祖父周福清に焦点を当て、人間関係の歴大な広がりをも視野に入れながら、家系の全容、周福清の生涯、不正事件の経緯、の三者を詳細に追究した労作である。

上記の目的を達成するため、本論文は以下の方法を採用する。1)周氏一族および姻戚等、周氏に関係する家の「家譜」を網羅的に収集し、血縁、婚姻に基づく関係の広がりを追跡する。2)清朝時代の官員の名簿、科挙の試験官、及第者の名簿等を博捜し、師弟、同年、同郷、同僚、上司下僚等の関係、人脈を展望する。3)档案(人事記録)、上奏、上諭、皇帝実録等の公文書を多用し、人事の異動、処分、判決等に関する基礎資料とする。4)周福清と友人が交わした手紙、知人および同時代人の日記によって、交遊の範囲、動向を把握する。5)周作人、周建人等、子孫、族人の回想、当時の新聞、野史を伝聞資料とし、人物、事件を再構成する手がかりとする。6)各資料の伝える諸相を単純に一本化せず、複雑なものはそれとして多面的に提示する。

本論文の前身となる研究「魯迅の祖父周福清——いわゆる科挙不正事件をめぐる——」は、1979年から87年にかけて、近代中国文学の研究誌に4回にわたって掲載された。以来、著者は多くの中国人研究者、公文書館、記念館関係者の協力を得て、従来入手が困難であった文献、あるいは近年ようやく公開された資料等を大量に収集し、日本と中国における最新の成果をも吸収しながら、自身の研究を拡大させてきた。これが本論文のもととなった12篇の連載論文(『東洋文化研究所紀要』114~140、1991-2000)である。

こうした経過からも知られる通り、本論文の第一の成果は、周福清と家系、不正事件に関する歴大な資料を最大限に収集、提示し、資料の面でこの分野の研究を飛躍的に前進させたことである。第二の成果は、周福清が引き起こした科挙の不正事件が、姻戚、知人、同年(同期及第)等、複雑な人間関係の中で発生し、周福清に対する救済の動きもまた、同様の人間関係の中で進行しているという事実——網の目のように広がる人脈の存在と、その強靱な力——を明らかにしたことである。第三の成果は、

周福清について、これまで以上に重層的な人物理解を示し、魯迅および周作人の研究に新たな視点と手がかりを提供したことである。

本論文は、魯迅研究のなかで意識的に無視されてきた人々に光を当てたい、との思いから出発し、中国近代文学研究の一環として構想されたものであるが、その成果は文学の枠を超え、他分野すなわち政治、経済、社会、風俗、とりわけ中国における各種ネットワーク——同族、姻戚、同郷、師弟、同学、同年、同業、同志等——の研究にも多大な貢献をもたらすものと考えられる。本論文には、資料の分析と論理の展開の面で不十分な点が見られること、公文書の解釈に多少の欠陥を含むこと、周福清の人物像の検討が今後の課題として残されたこと等、いくつかの問題はあるものの、本研究が従来の水準をはるかに超える大きなスケールと価値をもつことは疑いない。

以上の成果に鑑み、当委員会は全員一致で、松岡俊裕氏に対し博士（文学）の学位を授与することが相当であるとの結論に達した。